

ファラン 50mg×2日、GVHD 予防は FK506 を用いた。HLA は全例 2 座不一致であった。全症例で生着を確認し、1 例は移植後 126 日で無病生存中、3 例が死亡した。死因は、敗血症性ショック (13 日)、急性腎不全 (36 日)、ARDS (69 日) であった。早期死亡が多かったが、難治再発例でも長期生存が期待できる症例もある。今後は、移植後の合併症のコントロールが課題である。

#### 4. 当科において施行した造血細胞移植50例の検討

塚田 昌大, 金澤 崇, 田村 一志

小坂橋実希子, 森川 昭廣

(群馬大院・医・小児生体防御学)

1992 年より 2005 年までに当科において施行した造血細胞移植 50 例について検討を行った。症例は、男児 32 例、女児 18 例で、移植時年齢の中央値は、8.9 歳 (1-19 歳) であった。疾患は、造血器悪性疾患 42 例 (急性リンパ性白血病 26 例、急性骨髄性白血病 7 例)、その他 6 例であった。移植方法は、非血縁者間同種骨髄移植 21 例、血縁者間同 23 例、臍帯血 3 例、末梢血幹細胞 3 例であった。全体の 5 年生存率は、67% であった。疾患別での比較では、急性リンパ性白血病 63%、急性骨髄性白血病 83% であり、移植方法での比較では、血縁者間 63%、非血縁者間 76% であった。移植時期による比較では、第 1 寛解期 87%、第 2 寛解期 88%、第 3 寛解期以降および非寛解期では 40% であった。いずれも全国集計とほぼ同程度の結果であった。

#### 5. 当科における同種造血幹細胞移植症例の検討

入沢 寛之, 小野口裕乃, 宮澤 悠里

石崎 卓馬, 内海 英貴, 斉藤 貴之

松島 孝文, 塚本 憲史, 野島 美久

(群馬大院・医・生体統御内科学)

唐沢 正光 (群馬大医・附属病院・輸血部)

半田 寛, 村上 博和

(群馬大医・保・応用検査学)

【はじめに】 当科にて施行した同種造血幹細胞移植 47 症例 50 回について検討した。【方法および対象】 対象は 1994 年 12 月から 2005 年 12 月までに当科にて同種造血幹細胞移植を施行した 47 例 (AML10 例, ALL6 例, MLL1 例, MDS16 例, CML4 例, NHL5 例, HD1 例, MM1 例, AA2 例, RCC1 例)。年齢 18~61 歳 (中央値 41 歳)。血縁者間移植 33 回, 非血縁者間移植 17 回。【結果】 年間移植数は徐々に増加傾向で、臍帯血移植を含む非血縁者間移植の比率が高くなってきている。全症例の移植後観察期間中央値は 846 日 (7~4103), 3 年生存率は 52.0% であった。移植時、病勢のコントロールが不良な症例で有意に生存率が低かった。( $p=0.0017$ ) 【総括】 今回の検討では、移植後の予後因子は移植時病期であった。予後不良群では、早期死亡が多く、感染、臓器障害への対策が重要と考えられた。

#### 〈特別講演〉

乳幼児の肝不全に対する生体肝移植

末廣 剛敏 先生

(群馬大院・医・病態総合外科学)

小児肝移植のトピックス

笠原 群生 先生 (国立成育医療センター

特殊診療部移植免疫診療科)